CONSERVATION VOLUNTEERS Vol. 9

発行：特定非営利活動法人日本環境保全ボランティアネットワーク（略称：ＪＣＶＮ）

巻頭言＿＿ニホンミツバチ養蜂の楽しみと戦略記 *p1*
連載＿＿＿環境保全ボランティア活動と若者の自立支援（７）*p3*
ボランティア、ケガと弁当は自分持ち？（４）*p4*
実践的な環境保全活動の人材育成（４）
報告＿＿＿リスクマネジメント事例研究 *p5*
地域を巻き込むには（２）*p6*
お知らせ＿リーダーミーティング2015のご案内、ほか *p8*

巻頭言「ニホンミツバチ養蜂の楽しみと戦略記」

重松敏則（JCVN 理事長、九州大学大学院芸術工学研究院名誉教授）

近年、花粉の媒介に欠かせないミツバチが世界的・全国的に激減しており、巣群の消滅や全滅死によって、養蜂業はもとより農作物や花卉園芸の生産、さらには里山・里地の草木の多様性の存続にとって急務の課題となっています。これにはニコチノイド系の農薬散布も大きく関わっていると問題視されています。

私事ですが私がニホンミツバチの養蜂を始めて既に 10 年ほどになります。多くの巣群を養蜂していると人づてに聞いた福岡県黒木町の大工さんから、分蜂群が入ったばかりの巣箱を焼酎2本で貰いうけ、長年の念願が叶ったのです。その後、女王蜂がどんどん卵を産んで繁殖し、夥しい数のハタラキバチが出入りする強勢群(およそ 2 万匹)になりました。花を求めてとび出し、また蜜や花粉を持ち帰りと、次々と離着陸するハチ達の様子に、私は見とれて生活に楽しみが増えました。しかし、肝心の採蜜にはやり方が未熟なためか毎年のように失敗して、ハチミツが大量に採れても、蜂群が逃散してしまう始末です。春になっても空き巣箱のままで年を越したり、自然に分蜂群が棲みついてくれたりして年月が過ぎました。

そこで、巣箱をこれまでの「筒箱型」や「丸太型」ではなく、養蜂の入門書で知った「重箱型」の巣箱を取り寄せ、また東洋ランのキンリョウヘン(花がなぜかニホンミツバチを誘引する)を苗木業者に発注して巣箱のそばに置いたところ、自然の分蜂群がすぐに棲みついてくれました。また、採蜜の際にも重箱型だと最上段のみを包丁で切り取るので、下段に影響を及ぼさず、手際良くできるようになりました。

それに加えて今年の4月上旬から5月上旬には、庭のケヤキの幹に取り付けていた小鳥の巣箱の下に、分蜂群(いわゆる蜂球(だま))がまるでホッ

トスポットのように次々と取り付いたので、予め用意していた巣箱や追加発注した巣箱に麦わら帽子で採り込み、1号から5号の巣箱が縁側に並ぶことになりました。春は野山や公園、多くの家の庭に種々の花が咲きみだれますので、3つの強勢群の巣箱はすぐに蜂蜜(最下段の幼虫や蛹の巣も含めて)で一杯なります。こうして巣箱の中の空間が狭まるとハタラキバチ達は「やる気」を無くして、巣箱の入り口や箱の外側にたむろするようになります。そこで最上段の箱を包丁で切り取って採蜜し、それを最下段にはめ込んでやると、空間ができるのでハタラキバチ達は、またもや生き生きと働くようになりました。

こうして5月ころから、予想以上の大量の蜂蜜(さらし布の袋で濾過したもの)が取れるようになりました。当初は小瓶や中瓶に入れて親戚や知人に贈り物として郵送していたのですが、送料がかなり高くつき、また在庫も溜まる一方でさながら「蜂蜜屋敷」状態になりました。そこでJCVNのブランド名で販売し、収益を運営資金にしては、と思うに至ったのです。

ニホンミツバチの蜂蜜の価格は1升瓶(1.8L)で2〜3万円で取引とのことはかねがね聞いていたのですが、インターネットで検索したところ、やはりセイヨウミツバチの蜂蜜とは破格の差のあることがわかりました。ニホンミツバチの養蜂家は零細な経営のところが多いので、市場価格を撹乱してはいけないと思い、それに見合った価格でJCVNでの販売を運営委員会に提案したところ了承が得られました。しかし、県の農林事務所への養蜂の許可申請や保健所の認可、それにJASで規定されているラベルでの表示項目などについて、認定を受けるべきとの指摘がK理事からありました。さっそく役所回りをしてそれらを全てクリヤーできたのですが、ただJCVNでの販売行為が当方の約款に含まれていないとの指摘があり、またもや論議することになりました。

しかし、前述のように近年のミツバチの世界的・全国的な滅亡により、農作物や花卉園芸の生産、さらには里山・里地の草木の多様性の存続にとって急務の課題となっています。このような時、JCVNが蜂蜜の生産と販売に関ることは、約款にある生物多様性の保全や環境教育への貢献に当てはまるもので、理念に合致すると言えます。現在までのところ、販売はT理事が農産物の販売イベントなどで大きく貢献してくれており、少なからぬ販売益も得られています。

しかし、9月中旬ころになって野山に蝶や蛾の幼虫などがいなくなると、オオスズメバチが例年のように巣箱を襲撃するようになります。私も少なくとも30匹くらいは捕虫網で退治したのですが、1号の巣箱を除いて、強勢群の3号は籠城戦の末に入口が噛み破られて壊滅、その他の巣箱も空き家になりました。

最近ずいぶん寒くなりましたが、籠城戦を勝ち抜いた(対応が遅くなったものの、私の奮戦援護の甲斐もあって)1号からは、無数のハタラキバチが巣箱の出入り口から離着陸しています。また、スズメバチも私の姿を見ると逃げるようになりました。これで、また来春の分蜂群の飛来を期待し、JCVNブランドの蜂蜜販売につなげたいと思っています。このほか、養蜂には蜜蝋を濾過抽出して手づくりのロウソクをつくる楽しみもあります。来夏までには、スズメバチ対策として、金網で巣箱の出入り口をガードすべく思案中で、工夫をこらしています。

巣箱の出入り口

重箱型巣箱

分蜂群（蜂だま）

連　載

■環境保全ボランティア活動と、若者の自立支援（７）

若者自立支援団体利用プログラムを出発点としたグリーンパス（緑のキャリア形成）の可能性②　～　明治神宮外苑建造に学ぶ、公共事業での若者の活かし方　～

塚本 竜也（JCVN理事／特定非営利活動法人トチギ環境未来基地理事長）

新潮選書に、明治神宮　～「伝統」を創った巨大プロジェクトという本があります。明治天皇崩御の後創建された明治神宮が、西洋的近代知と伝統のせめぎ合いの中いかに全く新たな神社として生まれたかについて大変面白く描かれています。林学や造園的な見地からもとても興味深い話が多くあります（神宮内苑の森を、針葉樹林にすべきか、広葉樹林にすべきか等）が、その本の一章に、明治神宮と青年の関わりが書かれた章があります。

明治神宮は明治天皇が崩御されてから8年後の大正9年に代々木に創建された神社で、その後大正11年に外苑も完成し、都心に約70万㎡の広大な森が生まれました。特に外苑の建造の過程は、NPOやボランティア団体が学べる点が多くあります。１つは、民間有志による建設への参加という考え方と、手法です。実業家の渋沢栄一などがリードし、民間の力を活用し建設するという方向性が打ち出されました。それは事業者による協力というだけでなく、市民にも参加を呼び掛けたものでした。明治神宮外苑の森は、95,559本の献木により出来た森となりました。小学校、自治体など記念行事として多くの人が献木に参加した、市民参加による森づくりの先駆けです。

若者の力の活用、という点でも非常に先駆的な取り組みがありました。明治神宮の建設には、各地の18才～24才までの青年団員が13,000人、延べ110,000人が参加しています。若者たちは10-15日間の合宿をしながら、木を植え、工事に参加しました。食事は交代で作り、朝には学習の時間もありました。いまでいうところのワークキャンプの開催です。この活動をリードしたのは、田澤義鋪という人でした。明治神宮の建設という国家的な事業に、次の時代を担う若者の教育の場としてもいかす、というのはとても素晴らしい着眼点だと思います。この活動から各地の青年リーダーが多く生まれました。

米国でもCivilian Conservation Corpsという青年が何百万人と参加し、国立公園の建設などに取り組んだ公共事業があります。米国にある国立公園の歴史は、Conservation Corpsという活動に参加した青年たちの物語でもあります。その事業は失業にあえぐ若者とその家族を多く救い、良い若者を育んだとしていまも語り継がれています。

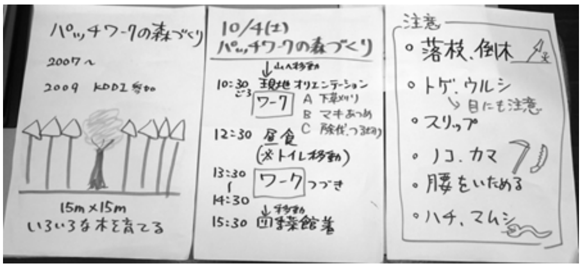
日本の未来を創るシンボリックな公共事業に、若者に参加の機会をつくる。これは今後の公共事業にもぜひ取り入れていただきたい手法です。大きなハコモノづくりをする必要はありません。例えば里山の保全を一気に進めるために手入れをする、ということを次の日本をつくるシンボリックなプロジェクトとして位置付け、その実践者として若者を大量に活用していくなど現代型でできる方法はあります。

その結果として、若者は実学を学び、将来的に林業や中山間地での仕事を目指す若者が増えることにつながると思います。体験活動をたくさんつくるよりも、国が本気になって取り組む事業に若者たちが本気で参加するという機会をつくるほうがその成果はずっと大きくなると考えています。

■ボランティア、ケガと弁当は自分持ち？（４）

ボランティアに伝える方法

小森　耕太（JCVN理事・NPO法人山村塾）



またも久々の連載再開です。「vol.1活動の責任、vol.2リスクアセスメント、vol.5対策を実行する。」とお伝えしてきた安全管理にまつわる話題ですが、今回は伝え方について紹介します。

活動前のオリエンテーション、皆さんはどのように安全面について伝えていますか？安全に関する話題提供は大変重要ですが、初心者や子供までいろいろな参加者がいると伝えるのも一苦労です。「説明した」という事実も管理責任上では重要ですが、やはり伝わらなくては意味がありません。山村塾では、初心者や子供、そして日本語の分からない外国人などいろいろな参加者が混じって活動をします。そんなときに役立つのは、Ａ３用紙がはさめる大き目の画板（またはホワイトボード等）。そのボードに大きな字で注意事項を箇条書きし、簡単なイラストや補足説明を加えます。これを使って話題提供を行うと、耳で聞いて、目で確認するという2種類の方法で伝えることが出来て、けっこう上手く伝わるものです。そして、「スズメバチが来たらどうすっればいいか？知ってる人～」というようにクイズ形式で参加者に尋ねたりするのも効果があります。

ＪＣＶＮの講座で出てくる「学習の三角形」では、話す10%、見せる20%、体験する70%の順に理解度が高まり、それよりも理解する方法は「人に教える」こととあります。事前の説明で体験させるわけにはいきませんので、「話す」に加えて「見せる」、そして余裕があれば「尋ねてみる」という方法をお勧めします。大切なのは、言ったかどうかではなく、伝わったかどうか。ぜひお試し下さい。

■実践的な環境保全活動の人材育成（４）

~九州大学芸術工学部環境設計学科２年の環境野外実習Ⅰ~

朝廣　和夫（JCVN副代表・九州大学芸術工学研究院）

連載と言いながら２年ぶりの本テーマの執筆となりましたが、今回は、大学での保全活動スキルの導入+αの教育について紹介します。JCVNのリーダートレーニングプログラムは、本誌vol.1(Jan. 2012)で紹介したBTCVのプログラムを模範とし、会員のノウハウも加え、リーダートレーニング研究会で議論しながら整え、共有しつつあります。会員の各団体では、ボランティア活動の初動期に行うことで、速やかに安全で楽しい活動を遂行し、質の高い活動成果を得ることに効果を発揮していると考えています。学に所属する私は、本誌vol.2(Apr. 2012)で紹介した文部科学省中央教育審議会が求めている21世紀の人材育成のポイントや、私共の環境設計学科における導入教育としての新入生合宿研修（１泊２日）の活動を紹介しました。

環境設計学科とは、建築、都市・地域計画・ランドスケープのデザイン能力を育成する学科です。緑に関しては、公園等を作るだけでなく、既存の緑地をどう保全するのか、農山村と都市の課題と特徴を調査・分析し、提案と共に実践する力の育成を目標としています。そこで、新入生合宿研修で経験した農山村での体験活動を次のステップに進めるため、２年生の科目として環境野外実習Ⅰ(選択科目)を新設しました。学習目標は、下記の３つを設定しています。

① 都市緑地を観察し、1/500の植栽の図面を描くことができるようになる。

② 環境管理活動におけるマネジメントができるようになる。

③ 植物を３０種、同定できるようになる。

①と③については、設計を行う上で、地域に残存する植物を同定し、それを図に示し保全の検討ができる基礎的な能力の育成で、キャンパスで実施しています。さて、②については、9月の夏休みを利用し、2泊3日で福岡県八女市黒木町の笠原東交流センターえがおの森に宿泊し、NPO法人山村塾の小森氏を非常勤講師に迎え、実習を行いました。環境管理実習の目標と内容は、下記のようにセットしました。

目標:農山村の自然地で環境管理活動のマネジメントができるようになる。

- リーダーシップを理解する。
- リスクアセスメントができるようになる。
- 道具の説明や、安全に使用できる。
- 現場において、安全で楽しい作業を遂行し、完成させることができる。
- チームで作業し、コミュニケーションをとることができる。

参加者は16名。内容は、講義に加え野外実習を2グループに別れ約1日半ほど行い、今回は2日目、スギ林群状間伐地に植栽したヤマザクラ・コナラ林に芽生えている雑木の植生調査と林道管理作業、3日目の午前中は竹林管理と棚田の作業を行いました。3日目の午後は、一日のプログラミングの流れとリスクアセスメント、感想をシェアし終了しました。また、この時期は、山村塾の里山80日ボランティアが実施されており、スペイン、インドネシア、ベトナム台湾のワークキャンプメンバーが滞在しており、彼らも含めた講義と作業を行い、英語を交えた交流活動も含めることができました。学生の授業への感想は、農林地の管理、ボランティアの技術だけでなく、このような異体験の大切さ、規則正しい生活、そして英語でのコミュニケーションの必要性を学んだようでした。

環境デザインは、これまでのような環境に関する知識や計画設計技術だけでは不十分であり、地域や海外、ボランティアなどとのコミュニティーと一緒に考えること、そして、新たな環境づくりにイニシアチブをとるリーダーシップが必要です。授業としてできることは限られますが、正課として実施できたことは、大きなステップでした。

リーダートレーニング研究会報告

■リスクマネジメント事例研究

志賀　壮史（JCVN理事／NPO法人グリーンシティ福岡理事）

安全管理に関する内容は、環境保全活動の現場リーダー育成には欠かせません。「リーダートレーニング研究会」では、第５回（2013年9月24日）で「リスクアセスメント」のテーマを取り上げていますが、今回は実際の事故・災害の事例から安全管理について学ぶ内容で実施しました。

８月２２日（金）１８：３０～２０：３０、福岡市NPO・ボランティア交流センター（あすみん）のセミナールームに集まったのは、参加者９名＋JCVN関係者５名。まずは、志賀から「新聞やネット等で、事故・災害の事例を収集し、ストックしよう」との提案を行いました。自然体験やキャンプ中の事故、登山や山菜採りの際の事故、

学校の課外活動や部活中の事故など、思わぬ事故や災害の事例を目にすることができます。
私たちにできることはそこから学び、備えることで、このような不幸な事故・災害を繰り返さないということだと思います。
研究会は、事故事例の新聞記事を読み、そこから見いだした「事実」、それについてどう思うかという「考え」、その上で何ができるかという「対策」を書き出し、3、4名でディスカッションした後に、全体でシェアするという流れで行いました。
一つ目に取り上げたのは、2012年11月に岐阜県で起きた落枝の事故。ご家族と森林体験講座に参加していた小学校1年生が落ちてきた枝が頭にあたり亡くなったといういたましい事故です。ヘルメット等の防護具の着用、事前の下見の徹底、そもそも手入れ不足の森林で体験プログラムを行うことの是非、続報ではじめてわかった当日の強風など、ボランティアや参加者を受入れる立場にある者にとって、非常にリアルな準備や判断ポイントについて、意見や反省が出されました。
続いて二つ目は、2010年7月に佐賀県で起きた川遊び中の水難事故。子どもの数に対して、救急救命士を含む十分な数の大人が監視する体制で計画されており、AEDの用意もありました。しかし、移動をはさんで子どもたちだけで川に入る時間帯が生まれたことで、指導者の目が少しの間、手薄になり起きてしまったのではないかと想像しました。運営体制の表だけで安心することはせず、プログラム時間に沿って参加者や指導者がどのような動きをするかを想定することが大切、という意見がありました。
最後の三つ目の事例は、高校野球の練習試合での落雷事故。2014年8月愛知県の例や2008年大阪府の例を取り上げました。屋外での活動では、悪天候、特に雷に対する判断が求められる場合があります。グラウンドには避雷針が設置されていたにもかかわらず、不幸にして落雷事故となりました。現場リーダーには、天候の予測や落雷からの避難方法について、正しい知識を持っているかどうかが問われると思います。
以上、実際に起こった三つの事故事例をもとにディスカッションを行い、改めて安全管理について考えることができました。このような事故事例に学び、被害者・被災者を出さないこと。来ていただいた参加者やボランティアを危険な目にあわさないこと。これが現場リーダーの最も重要な役割です。日頃から事故事例を収集・共有することが、安全に対する知識や意識を高めることにつながると思います。

■地域を巻き込むには（２）

平　由以子（JCVN理事／特定非営利活動法人循環生活研究所理事長）、**朝廣和夫**

10月16日にコミセン和白で開催された研究会には、17名が参加し実施されました。

★当日の流れ
18:00　あいさつ
18:35　バズトーク
　　　「印象に残っている地域のイベント」
18:50　プログラム紹介
　　　「小学校区レベルのコンポストのある暮らしを考える」
19:45　小休止
19:50　ミニプログラム
　　　「地域社会構造に与える要因を考える」
20:00　ディスカッション
20:20　終了、アンケート

まず、朝廣から、前回のまちづくりWSふりかえり（バズトーク・地域の要因やつながり・コンポスト事例）を行った後、バズトークでグループに分かれ自由な雰囲気で「印象に残っている地域のイベント」についてディスカッションを行いました。夏祭りでおじいちゃん、おばあちゃん多く、小学校も小さいため地域での関係性が少なく、出店は役割分担があったがにぎわった」「20代なのに40～50代でカンパイを言ったまちコンの婚活」「盆踊りでのアイスや太鼓」「宮崎では、昔は若者が多かったが、今は少なくなり、出店も少なくなった」等の地域での思い出話しが交わされた。
次に平によるまちづくりワークショップを実施した。この手法は循環生活研究所が10年にわたって実施しているオリジナルメソットで、海外研修で多くの共感と成果を得ているもので、今回JCVNで検証を行った。
パワーポイントによるこれまでのプログラムの活用事例とワークの説明が行われた。通常

（図１）のように、家庭レベルのワークを実施したあとに行うワーク２の街レベルでのコンポストがある暮らしをテーマに、小学校区レベルで3グループに分かれて実施しました。

図－１

[コンポストのある暮らし]
・ねこんぽストTOWN
・パープルタウン
・コンポスト犬町

それぞれのワークの結果をシェアし、工夫をこらしたユニークなまちづくりなど充実した内容になっていた。その後、地域社会構造に与える要因を考えるカリキュラムで、班ごとに意見を出していきました。

[地域社会構造に与える要因を考える]
●うまくいく要因(促進、実現)
・施設のごみ
・できた野菜おいしい
・アイディアを出せる、話しやすい、雰囲気
・お母さんのフットワークのかるさ！
・行政が積極的！
・イベント
・顔が見える関係
・農家さんの理解の浸透がはやい
・全体の意見をまとめられるコーディネーター
・先生が魅力的
・知識

●うまくいかない要因(阻害、利害が対立)
・交通便(アクセス)がよすぎて進まない
・「だましていっぱい農薬を使ってた」ようなこと。
・めんどくさい。

・行政理解が貧しい。
・3000個のコンポストをどう取り組むか。
・利用光、土地が不足。
・犬きらい→インセンティブ
・猫のフンコンポストの技術
・教える人が“知ったかぶり”だった
・できた野菜の安全性。

[プログラムを振り返り感想と全体シェア]
参加者で意見交換を実施し、以下の意見が得られました。
・教材が、具体的でやりやすい。
・今回のワークで真剣に考えることができた。あと30分くらい時間に余裕があれば、うまくいく要因、うまくいかない要因についてのワークの中でじっくり話し合えた。
・子どもを真ん中においたワークもできそう！発展性がある。
・もっともっと課題を入れるとよい。
・ローラルな、具体的なものである。
・教材がよかった。もっとバラエティな素材を加えてもいいかも。
・多世代で参加できそう。
・バズトークとプログラムをもっとつなげたほうがいい。
・このワークは意見が出しやすいと思う。
・様々なバックグラウンドの人でも参加しやすい。

参加者の満足した感想も多く、これまでのプログラムに、関連性をもたせて実施をすると多様な活用ができると実感しました。

お知らせ

イベント・ボランティア情報

●JCVNリーダートレーニング研究会
◇12/18（木）「環境保全活動の評価」

環境保全活動における活動の国際標準規格を考える回です。ヨーロッパ、アメリカ、オーストラリアなどの環境保全活動に取り組む団体が活動の持続的な発展を目指して作成した「環境保全ボランティア同盟認定プログラムConservation Volunteers Alliance Accreditation Program（2003年）」について実際の評価事例を交えて議論します。

と き　平成26年12月18日　18時半～20時半
進行役　朝廣和夫（ＪＣＶＮ理事）
会 場　福岡市NPO・ボランティア交流センター
（あすみん／福岡市中央区大名 2-6-46）
参加費（会員・学生）無料　（非会員）1,000円

◇2/19 「リーダーミーティング 2015 の総括」

今年度の 4 回目は、下記の「リーダーミーティング 2015」の総括を行います。みなさんのご参加をお待ちしています。
と　き 平成 27 年 2 月 19 日　18 時半～20 時半
会　場 福岡市 NPO・ボランティア交流センター
（あすみん／福岡市中央区大名 2-6-46）
参加費　（会員・学生）無料（非会員）1,000 円

●リーダーミーティング2015 「災害ボランティアの現場リーダー」

各地で頻発する自然災害に対し、多くのボランティアが活躍しています。災害の被害に対し、被災者や行政だけの力ではとても手が足りず、共助、互助の力が求められています。　しかし多くのボランティアが集まる災害現場ではときには混乱が生じることも。

今回のリーダーミーティングでは、災害ボランティアにおける現場リーダーに焦点をあて、活動時にどんなことが求められているのか？どんな課題があるのか？皆さんとともに語り合いたいと思います。ご参加おまちしております！
と　き：平成27年2月11日（時間未定）
会　場：福岡ビル9階
参加費：500円×60名（会員・学生除く）
主　催：ＪＣＶＮ
共　催：九州大学大学院芸術工学研究院
後　援：自然環境復元学会

●JCVNの仲間を広く募集しています！

あなたの支援が、「いつでも」「どこでも」「だれでも」できる環境保全活動をめざした団体のネットワークづくりの力になります。入会申込書をご送付いたしますので、事務局までお問い合わせください。

・個人正会員（¥10,000／年）
・個人賛助会員（¥5,000／一口以上）
・団体正会員（¥20,000／年）
・団体賛助会員（¥10,000／一口以上）

JCVN理事をはじめ、環境保全活動の専門家のノウハウが詰まった会報が、年に4回お手元に届きます！また、メーリングリストでもJCVNが開催・協力するイベント情報等を随時ご案内いたします。

活動への寄付も受け付けています。環境保全団体のネットワークづくり、リーダー育成支援のため、皆さまのご協力をお待ちしています！

［会費・寄付振込口座］
番号：０１７６０－９－１２２４０７
名称：日本環境保全ボランティアネットワーク

CONSERVATION VOLUNTEERS　９
■発行日：平成２６年１２月１８日
■発行頻度：年3回
■発行：特定非営利活動法人日本環境保全ボランティアネットワーク（略称：ＪＣＶＮ）
■事務局：〒810-0022福岡市中央区薬院4-5-2-202
tel/fax: 092-215-3966
e-mail: jcvn@greencity-f.org